

石巻会場

登壇者プロフィール



第1部 シンポジウム「震災と人権 ～一人一人の心の復興を目指して～」



パネリスト

奥田 知志 (おくだ ともし)

公益財団法人共生地域創造財団代表理事

日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師

特定非営利活動法人北九州ホームレス支援機構理事長

特定非営利活動法人ホームレス支援全国ネットワーク理事長

1990年 日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師就任 現在に至る

1990年 ホームレス支援組織 北九州越冬実行委員会に参加
事務局長就任

2000年 NPO法人北九州ホームレス支援機構設立 理事長就任

2006年 NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク設立 理事長就任

2011年 一般社団法人共生地域創造財団設立 代表理事就任

※2012年10月より公益財団法人に組織変更

【主な著書】

「ホームレス自立支援」(共著)(明石書店)

「主の招く声が」(共著)(日本キリスト教団出版局)

「もう、ひとりにさせない」(いのちのことば社)

「助けてと言おう」(日本キリスト教団出版局) ほか



パネリスト

友廣 裕一 (ともひろ ゆういち)

一般社団法人つむぎや代表理事

持続可能な社会について探求する中で、今でも石貨が価値を持つミクロネシア連邦ヤップ島を訪れて自給自足の暮らしを経験。その後、新潟の中山間地域の小規模集落を訪ね、継続的に関わる中で“豊かさ”について身体で考える。2009年「ムラアカリをゆく」と題して、日本全国の農山漁村を訪ねながら各地でお手伝いをさせてもらいながら泊めていただく旅を実施。約70か所の日本の農山漁村に滞在しながら、たくさんの人の暮らしや仕事に触れ、そこで生まれたご縁をもとに自分の役割を全うするべく旅するように働く。2011年3月17日から宮城県入りし、現在は石巻市・牡鹿半島の漁家の女性たちと「ぼっぼら食堂」「OCICA」の事業を立ち上げ、運営している。

【主な著書】

「クリエイティブ・コミュニティ・デザイン」(共著)(フィルムアート社)

「シゴトとヒトの間を考える」(共著)(シゴトヒト)

「OCICA ～石巻 牡鹿半島 小さな漁村の物語～」(一般社団法人つむぎや)



パネリスト

近江 弘一 (おおみ こういち)

株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長

有限会社コバルトール (Cobaltore 女川) 取締役社長兼GM

- | | |
|----------|---|
| 1981年 4月 | 株式会社宮城スズキ販売入社、同年12月退社 |
| 1981年12月 | 有限会社東北ダイビングセンター入社、営業担当 |
| 1984年 | 営業部門独立により株式会社モビーディック転籍入社 |
| 1999年 4月 | 株式会社モビーディック専務取締役就任 |
| 2004年10月 | 有限会社ファン・クリエーション取締役社長就任兼務 |
| 2006年 3月 | 有限会社コバルトールを設立、取締役社長に就任
新しい町づくりを提案する活動を開始 |
| 2006年 5月 | 株式会社モビーディック、有限会社ファン・クリエーション
の全職位を退任 |
| 2006年 6月 | 株式会社石巻日日新聞社 取締役総務局長に就任 |
| 2007年 6月 | 株式会社石巻日日新聞社 専務取締役に就任 |
| 2009年 6月 | 株式会社石巻日日新聞社 代表取締役に就任 |

【1981年】

大学卒業。鈴木自動車工業において入社研修後、2か月で営業現場に配属され、自転車店等を中心とした新規小規模取次店を担当し、新人ながら全国優秀営業所の一員となる。

【1981～1982年】

東北地区の漁協等へ漁具の営業を担当。

【1983～2006年】

モビーディックの創成期において、特に当時成長過程にあったウインドサーフィン店におけるマーチャンダイズ指導を軸とした営業の先頭に立ち、販売実績を6年で約5倍にし、業界における地位を確立した。その後は、社内組織の整備、情報システム、会計システムの導入など業務処理システムの刷新に注力し、現在の社内業務システムの骨格を整備した。また、ファン・クリエーションにおいては社内改革を断行し、数年来、赤字で推移してきた業績を単年で黒字化へ改善した。

【2006年～】

地元貢献を人生の活動テーマの軸と決め、約百年もの間、地元根ざして活動を続ける石巻日日新聞社と有限会社コバルトールの経営を軸とし、地域活性化の活動を開始。石巻日日新聞の赤字体質を単年で改善、東北リーグに昇格したコバルトール女川をベースにスポーツ育成活動を展開。2011年3月11日の震災に際して、手書きの新聞で注目される。現在、地域内への活動を継続しながら、震災を風化させない活動を展開中。

【主な著書】

「6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録」
(角川マガジズ)



パネリスト

鈴木 るり子 (すずき るりこ)

岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授
専門：公衆衛生看護学

- 2004年 岩手看護短期大学教授（現職）
一般社団法人全国保健師教育機関協議会理事
- 2005年 岩手公衆衛生学会理事 ※第24期岩手公衆衛生学会長
- 2010年 日本公衆衛生学会認定専門家に認定
- 2011年 大槌町復興まちづくり創造懇談会アドバイザー

【主な著書】

- 「地域医療テキスト Ⅲ地域医療を支える人材21看護職」(医学書院)
- 「吾が住み処ここより他になしー田野畑村元開拓保健婦のあゆみ」(編)
(萌文社)
- 「大槌町保健師による全戸家庭訪問と被災地復興」(共編)(明石書店)
- 「岩手県沢内村の保健医療福祉の統合、ふみしめて七十年」
(日本公衆衛生協会)
- 「全国保健師教育機関協議会 保健師教育の質向上に邁進した30年、
ふみしめて七十年」(共著) (日本公衆衛生協会)
- 「災害と孤立問題」※「社会的孤立問題への挑戦」(共著)(法律文化社)



コーディネーター
稲積 謙次郎 (いなづみ けんじろう)

ジャーナリスト
元西日本新聞社編集局長
元総務庁地域改善対策協議会委員
福岡県人権施策推進懇話会会長

1956年 西日本新聞社入社
1980年 〃 社会部長
1986年 〃 東京支社政治部長
1987年 〃 取締役編集局長
1991年 〃 常務取締役
1995年 株式会社西広代表取締役社長(2002年退任)
1993年～ 総務庁地域改善対策協議会委員(～1996年)
現在 北九州市人権施策審議会会長
福岡県人権施策推進懇話会会長
人権文化を育てる会代表世話人
太宰府市教育委員会委員長
鳥取県人権文化センター客員研究員

1956年西日本新聞社に入社。社会部長、政治部長、常務取締役編集局長などを歴任。1981年西日本新聞で展開した同和問題キャンペーンで、マスコミ界のタブーを打ち破ったとして日本新聞協会賞を受賞。

公職として、政府の地域改善対策協議会委員を務め、1996年、国の新しい同和行政の基本方策についての意見具申に関わる。その後、多くの自治体の人権行政指針の策定に関わってきた。

現在、福岡県人権施策推進懇話会会長、北九州市人権施策審議会会長、人権文化を育てる会代表世話人、鳥取県人権文化センター客員研究員、太宰府市教育委員長などを務める。

【主な著書】

「君よ太陽に語れ—差別と人権を考える」(西日本新聞社)
「ここにも差別が—ジャーナリストの見た部落問題」(共著)(解放出版社)
「ヒューマンライツは複数形—ジャーナリストの直眼斜眼」(西日本新聞社)
ほか

第2部 コンサート



友石 竜也 (ともいし たつや)

ミュージカルソウルキャンプアカデミー主宰
元・劇団四季所属

愛媛県出身。大阪芸術大学舞台芸術学科ミュージカルコース卒業。
1999年劇団四季研究所入所。
入団1年目にして「ライオンキング」主演シンバ役を射止め通算1,200回の出演を誇る。

「アイダ」ラダメス役も演じるが、2006年退団。
退団後は、TSミュージカル「calli～炎の女カルメン～」 「AKURO」 「天翔ける風に」 三作続けて出演。

その後、「ニューブレイン」 「音楽劇赤毛のアン」 「サイドショウコンサート」 「ビクタービクトリア」 「カラミティ・ジェーン」 「ルルドの奇跡」 「環境ミュージカル 青い地球は誰のもの」 など出演。コンサート活動多数。

宮城県石巻市や東松島市など東日本大震災被災地でのコンサート活動も多数行う。

石巻会場

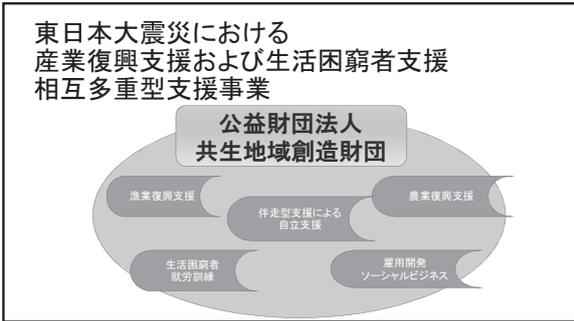
レジユメ



相互多重型支援とは何か

奥田 知志

公益財団法人共生地域創造財団代表理事



共生地域創造財団の概要

- 共生地域創造財団は、震災支援と現地の復興と、未来に向けた共生地域の創造を目的としてNPOと2つの生協が協働して設立
- 発起団体
 - NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク
 - 生活協同組合 グリーンコープ共同体
 - 生活協同組合 生活クラブ生協
- 2012年10月 公益財団法人認可

理事会

- 代表理事 奥田 知志 NPO法人 ホームレス支援全国ネットワーク 代表
NPO法人 北九州ホームレス支援機構 代表理事
日本バプテスト連盟 東八幡キリスト教会 牧師
- 理事 水内 俊雄 大阪市立大学 教授
理事 渡部 孝之 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 代表理事常務
理事 荒井 勇 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 総務部長
理事 片岡 宏明 生活協同組合連合会グリーンコープ連合 専務理事
理事 村上 省三 生活協同組合連合会グリーンコープ連合 常務理事
監事 赤坂 慎博 生活クラブ生活協同組合東京 常務理事
監事 内村 紀子 グリーンコープ福祉ワークス連合会 理事長
評議員 森松 長生 NPO法人北九州ホームレス支援機構 常務理事
評議員 立岡 学 NPO法人ワンファミリー仙台 代表理事
評議員 加藤 好一 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 代表理事
評議員 福岡 良行 生活クラブ事業連合生活協同組合連合会 専務理事
評議員 田中 裕子 生活協同組合連合会グリーンコープ共同体 代表理事
評議員 東原 晃一郎 生活協同組合連合会グリーンコープ共同体 専務理事

活動の4つの柱

- 見守り・生活伴走支援活動
 - 制度の狭間の方、支援の行き届かない被災者を中心に
 - 女川、大船渡における在宅避難者支援
- 産業復興支援
 - 人的支援、機材・備品支援、販路開拓など
 - 宮城亙理、牡鹿半島蛤浜折浜
- 仕事づくり支援
 - コミュニティ形成、生き甲斐づくり、小さな起業
 - 宮城・亙理の手仕事(ワタリス)
- 福島支援
 - 一次保養や遠隔地避難の支援
 - NPO法人 シャローム支援

設立目的と基本コンセプト

- ・【目的】
- ・①東日本大震災の被災者の復旧を支援する
- ・②福島原子力発電所事故の被害者を支援する
- ・③生活困窮状態に置かれた者を支援する
- ・④上記支援をすることにより新しい共生社会の創造を目指す

【基本コンセプト】

- ・①もっとも小さくされた者への偏った支援を小さくかつ継続的に行う。
- ・②当事者から聴き、学ぶ姿勢を持つ
- ・③困窮者の課題を経済的困窮と関係的困窮として捉える一伴走型支援の実施
- ・④絆の相互性を尊重する—助ける側と助けられる側の固定化の克服
- ・⑤自尊心と自己有用感を尊重する—相互多重型支援の実施
- ・⑥官民の支援活動・団体との連携を図る
- ・⑦復興ではなく新たな共生社会の創造を目指す。

相互多重型支援事業 漁業復興支援

蛤浜 折浜における復興支援とビジネスモデル



被害の状況	
折浜（おりのはま）	蛤浜（はまぐりはま）
<ul style="list-style-type: none"> 世帯数19戸、住民62名 震災により住宅4戸が全壊。昇回加工場も津波により全壊 現存住宅12戸、住民22名 電子きトロール船以外の漁船が津波の影響により所在不明 漁業者（前8戸/現4戸） 	<ul style="list-style-type: none"> 世帯数9戸、住民29名 震災により住宅5戸が全壊。加工場も津波で全壊 現存住宅3戸、住民8名 社壇漁業、サツパ船共にすべてが流失 漁業者（前2戸/現1戸）



支援開始後3か月目の出来事
 亀山区長
 ⇒「ありがたかったけど、重かった・・・」

絆とは何か？
 相互性（同時性）
 可逆性
 負荷性（絆は傷を含む）

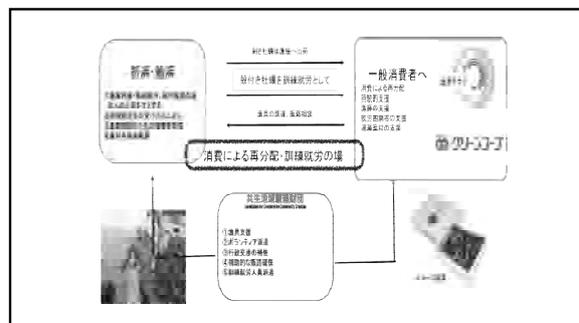
相互多重型支援とは何か？

①相互性
 ⇒助けられた者は、同時に助ける者

②多重性
 ⇒一つの事柄に二つ以上の意義を込める

相互性と多重性

- ①漁師 自らの復興⇔困窮者支援
- ②困窮者 自立⇔震災復興支援
- ③消費者 自立支援と復興支援
消費による富の再分配構造
- ④漁村後継者問題
出会うの場面・・・後継者の発掘
※相互的であり、かつ多重的
⇒一粒で二度三度おいしいカキ



相互多重型支援事業
漁業復興支援

宮城県亶理町における

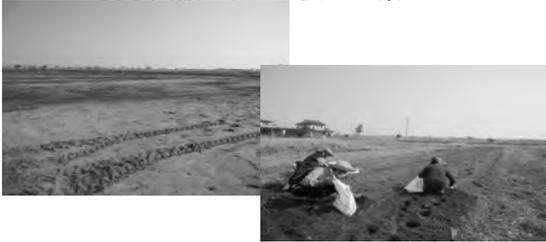
復興支援とビジネスモデル



現地の状況

- 被災沿岸部はイチゴ栽培が盛んだった。
- 一面のビニールハウスがすべてなくなり、畑を掘り起こすと瓦礫がでてくる状況
- イチゴ栽培には多額の費用で設備を整える必要がある。
- また、大規模区画整理対象地域であるので、自由にハウスなどを立てられない。

仙南エリア 亶理町、山元町での
イチゴ農家支援 津波の後の風景



一面トマト畑になりました！
加工用トマト事業

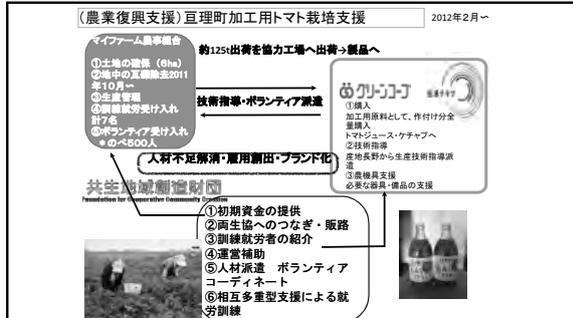


一杯収穫できました！1300トン



働いています！！





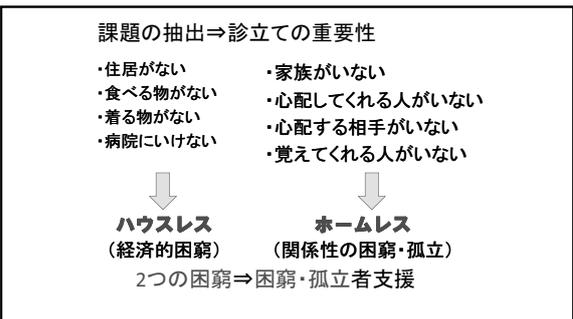
困窮者支援とソーシャルビジネス

- ①相互多重型であること
- ②意義のインセンティブ
- ③クオリティとストーリー
- ④選択的消費者の確保
- ⑤消費における富の再分配
- ⑥資源創造と人材育成

生活困窮者とは？

経済的困窮

社会的孤立



支援の両輪

- ・経済的困窮・ハウレス支援…**なに**が必要か
(衣・食・住・医療)
- ・関係的困窮・ホームレス支援…**だれ**が必要か
(絆の回復、人とのつながり)

困窮概念の見直し

従来の困窮概念

- ①経済的困窮
⇒ハローワーク・年金制度・生活保護など
- ②身体的困窮
⇒病院・健康保険・障害福祉・老齢福祉・介護など

さらに、第三の困窮 ③関係的困窮

※これまで困窮者の横には「誰か」がいた。その「誰か」が社会的資源につなげた。
 ⇒三つの縁…地縁、血縁、社縁…脆弱化
 ⇒第4の縁の必要
 ※第1、2、3の縁に代わる第4の縁ではなく、第1、2、3の縁、さらに既存の社会支援をコーディネートする第4の縁が必要…伴走型支援

伴走型支援の方向性

参加と自立

従来⇒自立した者が社会に参加できる
しかし・・・参加は、自立の前提

伴走型支援の必要 モデルとしての家庭

家庭が持つ4つの機能

- ①受け皿的機能—家庭内サービス提供
住居、食事、睡眠、看護、教育、服飾・・・
- ②記憶
出来事・経験・思い出・・・
- ③持続性のある伴走的コーディネート機能
家族の成員のニーズに応じた社会的資源との連携を
コーディネートする。家庭外サービスの確保。
- ④役割の創出・・・自己有用感

自尊感情

しかし、家庭が崩壊した

- ①受け皿機能・サービス提供
→既存の社会的資源の活用で対応
・・・例えば、介護事業等・コンビニなどなど
- ②記憶
- ③伴走的コーディネート機能
- ④役割

この3つは
欠落!

社会的創造する



家族・家庭は、機能を果たすと以前に
「存在そのもの」であった

↓

伴走型支援の二本柱

- ①処遇の支援・・・点の支援
 - ②存在の支援・・・線の支援
- ※これまでの支援現場の多くは処遇中心
※処遇を円滑に回るためにも存在は重要
※存在の支援は、支援の相互性を可能にする

困窮者支援の三つの要素 (DSP)

- ①データベース (DB)
 - ②サポートプラン (SP)
 - ③パーソナル・サポート・パーソン
—伴走型支援
(PSP: PSSではない!)
- 人を支援するのは人である
→パーソナルは、「個別」のみならず、
人格(ペルソナ)に対する支援・・・全人支援

伴走型支援における 二方面戦略

- ①ひとりの路上死も出さない
 - ②ひとりでも多く一日でも早く
路上からの脱出を
- ①と②⇒対個人
- ③ホームレスを生まない社会の創造
⇒対社会

貧困は社会そのものの問題

- ①「困窮者の社会復帰支援」ではない
- ②そもそも復帰したい社会か？
- ③歪んだ社会の補完的活動への転落を防ぐ
- ④新しい社会(地域)の創造へ

「宮城県石巻市・牡鹿半島 小さな漁村の物語」

友 廣 裕 一

一般社団法人つむぎや代表理事

- ・ 避難所のアセスメント調査のため 2011 年 3 月 17 日現地入り
 - 石巻を中心に、宮城県内の避難所を回る
 - 「被災地」「被災者」という言葉の違和感

- ・ 牡鹿半島・鮎川浜のお母さんたちとの出会い
 - 漁網の補修糸によるミサンガづくり
 - 団体名は「マーマメイド」
 - 販売するにあたって決めたこと
 - 浜のお母さんのお弁当屋さん「ぼっぼら食堂」
 - 雑魚を中心に使用し、家庭料理を応用したお弁当
 - 地元の仕事として定着させることが目標

- ・ 牡鹿半島・牧浜のお母さんたちとの出会い
 - 地元に生息する鹿の角と漁網の補修糸でつくるアクセサリー「OCICA」
 - 牡蠣の浜で、牡蠣剥きの代わりにする仕事をつくる
 - 地元の素材&地元の技術との出会い
 - 物語が手渡されていくように国内外への広まり

- ・ 役割としての「仕事」の大切さ
 - 与えられるより、与えることの喜び
 - 自己肯定感や尊厳は言葉を重ねても限界がある
 - 「つながる」ことの価値

2011.03.11 東日本大震災 ～石巻地域で起きたこと～

近江 弘一

株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長

①震災と石巻日日新聞

②生きていくために

③復興と地域貢献事業

—岩手県大槌町保健師による全戸家庭訪問調査から見えてきたこと—
～心のスイッチは、いつも3・11のまま、繰り返し押し寄せた津波のようにいつも顔を出す～

鈴木 るり子

岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授

岩手県大槌町は、地震による大津波、その後の火災により、市街地の52%を喪失し、人口の7.8%を失った。さらに、役場の流出による行政機能も失われ、岩手県で最も人口当たりの被災者の多い自治体である。津波は、大事な人も財産も一飲みにして立ち去った。その後の人々に「あとは任せたよと言いながら」残された私たちは、ただ茫然と心を亡くしたように過ごした。2日後に、我が家を見に行ったら。寸断された道。瓦礫と化した街。私たちの暮らしはどこに消えたのか…。会う人会う人に涙でぐちゃぐちゃになった目で会話するしかなかった。「良かった」「生きていてよかった」「ウンウン…」声にならないうなずきだけの会話だった。「できることをしよう」「advocator 代弁者になろう」「大事な人に別れを告げることも許されず命を失った人々の…。」誰にでも起こる災害死だとしても約1,300人の尊い命はあまりにも重いものだった。

大槌町で28年間保健師として勤務していたこともあり、「待っていたよ」「やっぱり来てくれた」「来ると信じていた」との住民の声に励まされ、全国の保健師に全戸家庭訪問を呼びかけた。大槌町までの交通は遮断され、朝夕は氷点下になる寒い時期に全国から137人(延べ555人)の保健師が集結し、2011年4月23日から5月8日までの16日間、農家の作業小屋で寝袋に寝て、自炊をしながら家庭訪問は開始された。黄色いベストを着た保健師たちは、見るみるうちに住宅地図を黄色のペンで塗りつぶしてくれた。津波で全壊した家屋を除く3,728戸、5,082人の健康調査をした。全住民の安否確認は被災前の住民基本台帳人口16,054人中13,935人(86.8%)を把握した。調査で際だった健康課題は高血圧だった。全国平均より高血圧症有病率が高く、とりわけ若い世代、働き盛りの世代に顕著だった。また、「不眠」の訴えが多く、自覚症状では精神面の症状についての訴えが高率だった。要フォロー者の支援必要理由で最も高かったのは「心のケア」で37%だった。住民の安否確認結果を人口ピラミッドにし、健康課題をまとめ町の復興計画の参考にしてほしいと5月7日に町への提言書第一報を提出した。9月6日には第二報の提出、10月には住民の方々への説

明会を開催し、住民とともに健康課題解決の行動計画を立てた。

2012年、講演のため、鹿児島空港に着いた。迎えの車に乗り、街路樹の中に1本咲いている百合の花を見た。「鹿児島の季節は岩手より2か月早いんだ」そう思ったとたん、私の脳裏に津波ですべてを失った我が家の庭が現れた。家の守り神だった伽羅の大木の傍で咲く百合の花は、毎年入盆に、我が家の8人の仏様をお迎えする役割を担っていた。美しい百合の花の周りには、アゲハチョウが飛び交い、まるで仏様の話し相手をしているようで、私は好きだった。私は、2、3回瞬きをして、「ここは鹿児島、今は6月、津波から1年3か月過ぎている」呪文のようにつぶやきながら、外の景色に目をやった。これが「心のスイッチは、いつも3・11」である。突然襲い掛かる喪失感に始めは戸惑った。何気ない会話の中で、食事中に、書店等で全く予測なく現れる。しかし、東日本大震災から2年過ぎても進まない復興の遅れが、この「心のスイッチは、いつも3・11」を活発に動かしているように感じている。復興の遅れは「心」や「身体」の復興も遅らせている。

平成25年度 人権シンポジウムin 石巻 震災と人権

一岩手県大槌町保健師による 全戸家庭訪問調査から見てきたこと

～心のスイッチは、いつも3・11のまま、
繰り返し押し寄せた津波のようにいつも顔を出す～

2013年 8月 31日 (土)

石巻市 遊楽館 かなんホール
岩手看護短期大学 鈴木るり子

本日の内容

- 2011・3・11 東日本大震災の被災状況
- 岩手県大槌町の全戸家庭訪問健康調査から見てきた、健康被害
- 復興に向けた街づくり・健康づくりとは

2011年3月11日津波が来ました。

大事な人も財産も一飲みにして立ち去りました。
その後の人々に「あとは任せたよと言いながら」残された私たちは、ただ茫然と心を亡くしたようにその後を過ごしました。
2日後に、我が家を見に行きました。寸断された道。瓦礫と化した街。私たちの暮らしはどこに消えたのか……。会う人会う人に涙でぐちゃぐちゃになった目で会話するしかありませんでした。
「良かった」「生きていてよかった」「ウンウン……」声にならないうなずきだけの会話でした。「できることをしよう」「advocator、代弁者になろう」「大事な人に別れを告げることも許されず命を失った人々の……。」
震災は誰にでも降りかかるとは言っても、1,400人の命はあまりにも尊く重いものでした。

東日本大震災の被災状況

- 巨大地震とその後の大津波、さらに放射能汚染によって戦後最悪の被災となった。
- 死者：12都道府県：1万5854人
(60歳以上：65.0%)
- 行方不明者：3155人
- 避難者：34万3935人
- 全半壊家屋：37万2974戸
(2012年3月10日警視庁まとめ)

津波による健康問題

- ・ 破傷風・レジオネラ症
- ・ ウイルス性腸炎
- ・ 肺炎・マイコプラズマ肺炎
- ・ 低体温
(水温5度以下：30分で意識不明、90分で死亡)

溺死(岩手県：89.9%、宮城県：91.4%、
福島県：88.5%)
トリアージ黒か緑の被災者が多く、トリアージ赤や黄色はほとんどが慢性疾患との関連

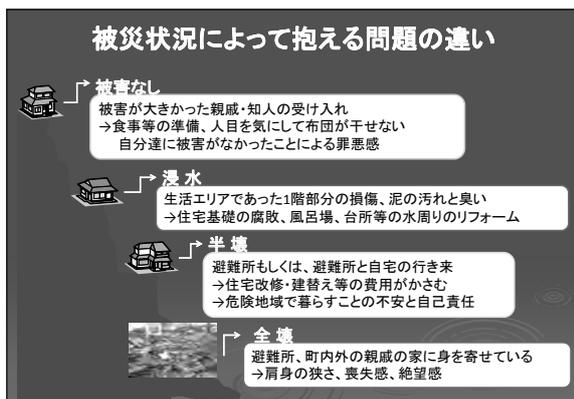
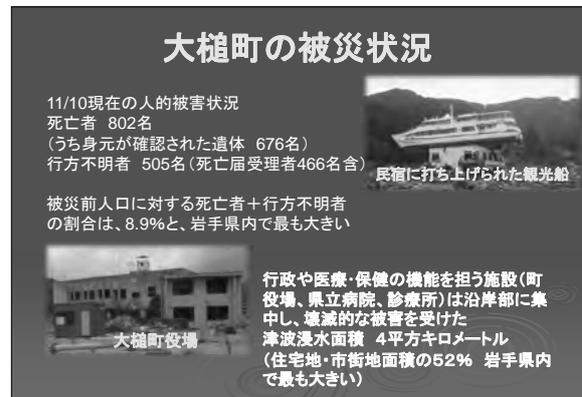
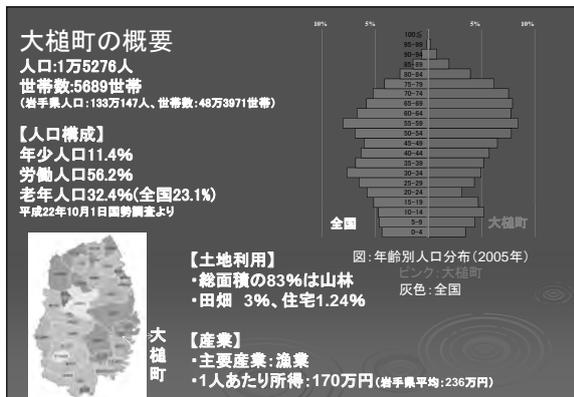
危機の結果に影響する3要素

- ①緊急対応行動の適切さ
 - ②効果測定
 - ③決断と行動のスピード

状況に応じたマネジメント

プランニング

- ①平常の準備
悲観的に考え楽観的に行動できる体制
- ②初動対応能力：情報収集・判断・実行力
- ③再発防止ができる体制を作り上げる



大槌町の人口の変化 (人)

	震災前	震災後	増減
40歳以上	10,704	8,937	△1,767
65歳以上	5,069	4,047	△1,022
全人口	16,054	13,803	△2,251

資料:大槌町

避難者の推移(生涯学習課調)

区分	3月11日	3月18日	4月10日
避難所数	集計不能	38	38
避難者数	1,128 * (城山体育館のみ)	5,144	6,173
備考	初回	避難所数最大	避難者数最大

- ### 大規模災害時の避難所の問題
1. 避難所数の不足
 2. 水・食料等の不足
 3. 感染症の問題
 4. トイレの問題
 5. ペットの問題
 6. 情報不足による混乱
 7. 認知症・要援護高齢者・障害者の問題
 8. 霊安室の必要性

応急仮設住宅の入居状況

(2011・11・30現在:資料大槌町復興局被災者支援室)

区分	内容
団地数	48団地
住宅戸数	2,106戸
うち入居世帯数	2,074世帯
うち入居者数	4,687人
高齢者等共同仮設住宅	40戸
うち入居者	17人

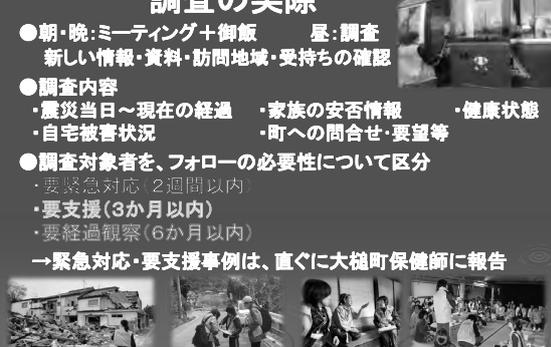
- 全戸家庭訪問健康調査活動概要**
- 1 調査目的
- ①安否確認による住民基本台帳の整備
 - ②住民の健康問題の明確化
 - ③早急対応・支援者への支援と町保健師への連携
 - ④町の復興に向けての提言
 - ⑤町の保健福祉計画などの将来策定への活用

- 2 実施方法**
- ・調査A:保健師による全戸家庭訪問(避難所含む)
 - ・調査B:フォーカスグループインタビュー
青年団・婦人会・消防団
 - ・調査C:保健福祉関係の社会資源に重点を置いた地区診断。特に福祉避難所となった施設6法人
- 3 実施日程:2011年4月23日(土)~5月8日(日)
- 4 参加者
全国保健師教育機関協議会・NPO法人公衆衛生看護研究所・全国保健師活動研究会の呼びかけで集まった保健師 全国から137人、延べ555人参加

- 5 調査結果**
- ・調査A:訪問件数:3,728件、相談件数:5,117件
早急に対応が必要:53人(1%)、要支援:229人(4.5%)
要経過観察580人(12.6%)
*きょうされんの実態把握:113人
人口ピラミット作成:入力済13,935人(86.8%)
 - ・調査B:5月5日実施
 - ・調査C:5月5・6日 6法人実施
- 6 町への提言
5月7日:副町長へ、5月8日:総務課長・地域整備課長
- 7 復興委員会への参画
大槌町復興まちづくり創造会議メンバーとして10月13日参加

調査の実際

- 朝・晩:ミーティング+御飯 昼:調査
新しい情報・資料・訪問地域・受持ちの確認
- 調査内容
・震災当日~現在の経過 家族の安否情報 健康状態
・自宅被害状況 町への問合せ・要望等
- 調査対象者を、フォローの必要性について区分
・要緊急対応(2週間以内)
・要支援(3か月以内)
・要経過観察(6か月以内)
→緊急対応・要支援事例は、直ぐに大槌町保健師に報告



- 大槌町への提言書の提出**
- 「岩手大槌町民の健康状況把握のための訪問調査」に基づく提言(第一報)
- 平成23年5月8日(日)
- 提言者
- ・鈴木るり子(岩手看護短期大学・教授、元大槌町保健師)
 - ・村嶋幸代(一般社団法人全国保健師教育機関協議会・会長)
 - ・他、調査に参加した保健師141名
- 協力団体
- ・NPO法人公衆衛生看護研究所
 - ・全国保健師活動研究会
 - ・一般社団法人全国保健師教育機関協議会

提言書

- ①医療サービス…入院ベッドが確保できる県立大槌病院の重要性(高血圧、脳卒中の発症、整形外科的疾患が多い)
- ②保健サービス…生活習慣の予防、自殺予防、孤立化予防(人口に約半分が住むことになる仮設住宅における健康管理の充実)
- ③職…働く場の確保(復興計画)、地場産業及び商店の復興
- ④住…早期危険区域の指定、質の高い仮設住宅の確保
- ⑤教育…学童・思春期に対してのこころのケア、社会教育の集える場の必要性
- ⑥交通アクセス…通院の足の確保、通学バス、JRの復活



岩手県大槌町民の健康状況把握のための訪問調査 (第二報 分析結果と復興計画への提案)

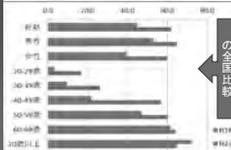
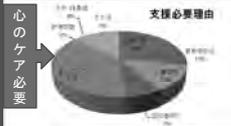


平成23年度厚生労働省老人保健事業推進費補助金(老人保健健康増進等事業分)「地震による津波で被災した一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活再構築のための支援連携の推進化」事業班

平成23年9月6日

1.町民が元気になる保健医療福祉活動を！

- ・ 1)こころの元気のために
- ・ 2)からだの元気のために



- メンタルサポートと治療体制の確立
- 今こそ「予防」、改めて「予防」!
- 経年の健診・健康チェックの必要性
- 町民が高血圧予防に本気で取り組む強い町に! とりわけ減塩!
- 「健康格差」を認識する必要性
- 予防の要は「原因と向き合い」「変わる住民を信じる」保健師活動
- ひいては生活習慣病、脳血管疾患 そして認知症の予防になる。
- こども、若者世代から取り組
- 医療・福祉連携の充実
- 的確な治療、入院ができる病院を
- 内科、整形外科・精神科等
- 福祉施設に加え、小規模多機能等様々な住まい方の支援機能が必要

被災後の高血圧発症や悪化が顕著

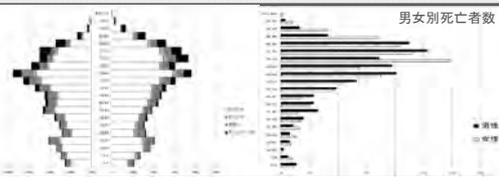
血圧の種類	合計	高血圧の現病型・既往歴		現病型生活習慣病関連疾患		高血圧の現病型・既往歴		現病型生活習慣病関連疾患	
		なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
1 基準高血圧	85	69	16	63	22	6.2	1.4	5.7	2.0
2 正常高血圧	155	104	51	89	66	9.3	4.6	8.0	5.9
3 正常高値血圧	185	85	100	78	109	7.6	9.0	6.8	9.9
4 1度高血圧	138	72	66	67	71	6.5	5.8	6.0	6.4
5 2度高血圧	133	50	83	48	85	4.5	7.5	4.3	11.9%
6 3度高血圧	70	24	46	25	45	2.2	4.1	2.2	4.0
7 収縮期高血圧	347	170	177	137	210	15.3	15.8	12.3	18.9
合計	1113	574	539	505	608	51.6	48.4	45.4	54.8

高血圧の有無と自覚症状・心理的初期対比を要する状況との関連(有意差・傾向ありの提示)	不眠		1過去のトラウマ		2災害による喪失		3経済的な問題		合計	
	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり		
1 基準高血圧	人	388	39	418	7	425	0	408	19	425
2 正常高血圧	%	90.8	9.2	98.4	1.6	100.0	0.0	95.5	4.5	100.0
3 正常高値血圧	人	583	95	658	30	680	8	642	46	688
4 1度高血圧	%	88.2	13.8	95.6	4.4	98.8	1.2	93.3	6.7	100.0
5 2度高血圧	p<0.019 *	979	134	1078	37	1105	8	1048	65	1113
6 3度高血圧	%	88.0	12.0	96.7	3.3	99.3	0.7	84.2	5.8	100.0
合計										

既往がなく震災後発症者が多数
心身や社会的問題が高血圧の引き金に

地震・津波災害後の大槌町人口ピラミッド

- ・ 1)高齢者、働き盛りの方々を多く亡くしました。
- ・ 2)町外に行かれた方は各年齢層に渡っています。



- 力のある町民を増やしたい、魅力ある町づくりを重点施策に。
- 震災によって町外に出てしまった人々を町の資源と考え、彼らが力を蓄えて戻って来ることができる基盤整備を。
- そして新たに若い人が入ってくる町づくりと広報。
- その人びとが新たな物流や産業を大槌町にもたらすように。
- 大槌町の文化を譲りながら、これからの健康で安全な暮らしを皆で築きたい。

大槌町健康生活調査(2011.4/23-5/8)
町民の皆様へのご報告

今日はその方々全体の状況を
ご報告

に自身の「大槌町の」健康づくりについて考えてください



全町訪問で町内約
6100人の力におま
いりました

町にすでに対応が
必要な方が
報告されました

平成23年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金(老人保健事業推進等事業分)
「地震による被害で被災した一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活再建等
のための支援過程の推進」に採択

平成23年10月5・6・13日

大槌町役場への提案書(案)

町の元気回復の要・高血圧予防に 町民とともに
10年間本気で取り組み、成果を公表してください

塩の代わりに塩りポン?

塩とりりポン ♥ **キャンペーン**

1. 塩とりりポンのデザインコンテスト! ハコッを作って推進リーガーや、毎年の塩とり大会参加者に配布!
2. ワーキング大会など各種行事に合わせ大々的にPR!
3. 小学生・中学生で塩とりポンを組織して「突撃町民検こはんキャラバン」などを積極的に展開!
4. 塩とり料理&工夫コンテスト(個人部門・男性・女性・学生・団体部門・地区組織・商店・地区など設け表紙)
5. 10年間の健康中、毎年高血圧改善者に講話などの機会塩とり講師に任命して学校などで講演を

被災地に必要とされる保健師活動

- 1) 支援については住民基本台帳との統合を考える
- 2) 住民の健康情報は、すべてデータ化し、早急に被災地へ情報提供する
- 3) 被災地支援をするためには、被災地と連絡調整の取れるコーディネーターの配置(教育の充実)
(各県1人、例:環境研究センターに配置)
- 4) 被災派遣保健師(DPHNT Disaster Public Health Nursing Team)の創設
- 5) 被災地における被災前の保健師活動の評価
(地区担当制によるポピレーションアプローチの有無)

東日本大震災被災者の健康状態に関する調査(厚生労働省科学特別研究事業)

概要: 東日本大震災被災者を対象に、心血管疾患やPTSDなどに関する長期間追跡調査を行い、被災者の健康管理ならびに今後の施策立案に活用する

- 1 調査対象者: 被災3県(岩手・宮城・福島)3万人
- 2 内容: 聞き取り調査、血液検査、血圧測定等
10年間追跡、18歳以上はアンケートと健診、18歳未満はアンケート調査のみ

岩手県の調査

- 1) 対象地区: 大槌町・山田町・陸前高田市
- 2) 対象住民: 3市町村全住民
- 3) 期間: 10年間
- 4) 内容
 - ① アンケート: 0-2歳、3-6歳、小・中・高校生、18歳以上。追加調査: 高齢者、アレルギー、特定疾患、透析、障害者、がん患者
 - ② 健康診断: 18歳以上、大槌町は歯科健診実施
- 5) 大槌町: 12月8-22日実施、受診者2,112人

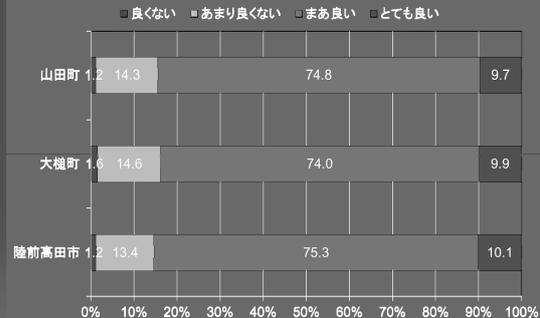
追跡調査(10年)

- 1) ベースライン調査の繰り返し(6ヶ月ごと)
- 2) 長期追跡
 - ・ 住民基本台帳の閲覧による転居・死亡の確認
 - ・ 死亡者については、死亡小票の閲覧による死因調査
 - ・ 脳卒中罹患調査
 - ・ 心疾患(心筋梗塞、心不全)罹患調査
 - ・ 介護保険の認定状況: 認定区分と認定月日
 - ・ 医療の受療状況: 医療費データ(国民保険と後期高齢者医療保険のみ)

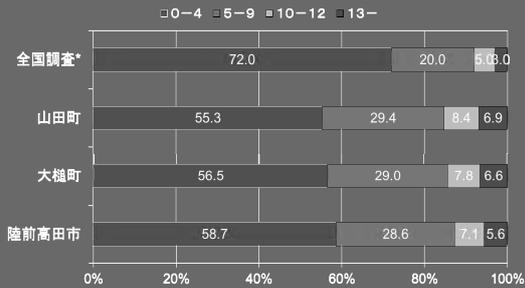
被災者健診実施市町村の受診状況

市町名 (実施時期)	18歳以上人口 (10月1日現在)	受診者数 (受診率)	同意者数	同意率
山田町 (9/6~11/15)	14,270人	3,436人 (24.1%)	3,216人	93.6%
大槌町 (12/8~22)	10,788人	2,171人 (20.1%)	2,079人	95.8%
陸前高田市 (10/3~12/16、 2/1~2)	17,228人	4,953人 (28.7%)	4,908人	99.1%
合計	42,286人	10,560人 (25.0%)	10,203人	96.6%

健康状態



被災地受診者と全国の心の元気さ(K6)得点分布の比較



*全国から多段階無作為抽出された20歳以上の住民2000名(回答1183名)川上他:2007

テーマ: 東日本大震災住民 (大槌町民)におけるソーシャルキャピタルに関する研究

目的

岩手県で最も人口当たりの被災者の多い大槌町民のソーシャルキャピタル(以下、SC)について「ネットワーク(以下SN)」「信頼」「互酬性」の3要素から成るとするputnamの「SC」の定義に基づき、東日本大震災で被災した大槌町民の「SN」と「周囲への信頼感・互酬性」について検討した。さらに被災後の「SC」の高低を左右する要因を明らかにし、今後の地域づくりに向けた支援策への示唆を得ることを目的とした。

ソーシャルキャピタルとは

ソーシャルキャピタルについては様々な定義や議論がある。例えば、パットナム(1993)は「ネットワーク、信頼、規範など協調的な行為を促すことによって社会の効率を高めうる社会組織上の特性」としている。信頼、規範などの従来の社会的結合を示す概念に加えてネットワークという、集団や組織を超えた個人間の関係性、例えば空間的には距離のある友人関係などに注目している点が現代社会の分析に適している。

Putnam, R.D. Making Democracy Work. Princeton, NJ: Princeton University Press.
ロバート・パットナム(河田潤一訳) 哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造 NTT出版

方法

1. 対象と方法

平成23年度にコホート調査に同意が得られた18歳以上の住民2,085人を対象とした(同意率96.0%)。調査は平成23年12月に行った。調査票は、健康診査の案内状に同封し、会場に持参するように依頼した。調査票を忘れた住民や、調査項目に不備のあった住民には専門の調査員が聞き取り調査を実施した。

2. 倫理的配慮

対象者にはいつでも調査への同意を撤回できることを説明し、同意を得た。

本研究は、岩手医科大学医学部倫理委員会の承認(H23-69)を得て実施した。

結果と考察

本研究はSCの構成要素である「SN」と「周囲への信頼感・互酬性」に着目した。

SN調査項目

* 友人は、近くに住んでいる人を含むあなたの友人全体について考えます

	0人	1人	2人	3-4人	5-8人	9人以上
1) 月に1回、会ったり話をしたりする家族や親戚は何人いますか?	1	2	3	4	5	6
2) 月に1回、会ったり話をしたりする友人は何人いますか?	1	2	3	4	5	6
3) 個人的なことでも、気兼ねなく話せる家族や親戚は何人いますか?	1	2	3	4	5	6
4) 個人的なことでも、気兼ねなく話せる友人は何人いますか?	1	2	3	4	5	6
5) 手助けを頼める家族や親戚は何人いますか?	1	2	3	4	5	6
6) 手助けを頼める友人は何人いますか?	1	2	3	4	5	6

SCの調査項目

	強く思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	全くそう思わない
7) まわりの人々はお互いに助け合っている。	1	2	3	4	5
8) まわりの人々は信頼できる。	1	2	3	4	5
9) まわりの人々はお互いにあいさつしている。	1	2	3	4	5
10) 何か問題が生じた場合、まわりの人々は力を合わせて解決しようとする。	1	2	3	4	5

1. 対象者の特性

女性が62.2%であった。過半数が60代以上であった。避難所を含めた転居回数は、「一度も転居していない」「1~2回」「3回以上」が約3分の1ずつを占めた。約半数は経済的な暮らし向きを「苦しい」と回答した。

2. SN

LSNS-6で12点未満だった対象者は42.4%で、平均得点は13.0点(標準偏差6.2)であった。SNは60代に比べ、50代で低値であった。また、「女性」、経済的な暮らし向きが「苦しい」と回答した者でもSNが乏しいことが示された。単変量解析では震災の記憶のうち「思い出すと体の反応が起きる」という群で、そうした経験がない群に比べSNが乏しいことが示されたが、多変量解析では有意な違いは見られなかった。

3. 周囲への信頼性・互酬性

周囲への信頼感・互酬性の平均値は15.6点であった。得点の比較は難しいものの低い値ではないと考えられた。関連要因を検討したところ、60代に比べ、70代、80代以上で得点が高かったが、50代では得点が低かった。また、「男性」、「自覚症状あり」、「思い出すと体の反応が起きる」、「暮らし向きが「苦しい」で得点が低かった。避難所を含む転居をしていない群に比べ、転居回数が多い群で、得点が低かった。男性や心身症状のある住民の他、発災後転居した住民では「周囲への信頼感・互酬性」が感じにくい状況にあることが推察されるため、重点的な支援が必要と考えられた。

本研究の限界と今後の課題

本研究はSCを構成するSNと「周囲への信頼感・互酬性」の2側面に着目した。本研究には、SCが低く孤立している住民が調査に参加していないというサンプリングバイアスが考えられる。しかし、本研究は被災者の方々の協力を得て行われた数少ない大規模調査である。被災後の生活再建の基盤としてのSCに着目し、SCを高める環境を整えることが重要である。被災者が新しい地域社会を創造していくためのにも、SCを考慮に入れた政策的な取り組みが必要である。

津波は
ソーシャル・キャピタルを
低下させた
目指す地域づくりは
ソーシャル・キャピタルを
向上させること

被災地のこれから

- 復興には、まず「健康」づくり
- 終の棲家づくり「安心」の提供
- ソーシャルキャピタルを高める地域づくり

優れたアクションリサーチャーの特徴 (essential characteristic)

- スタミナ(心理的・身体的)
- 忍耐力
- 成功するという決意
- 他者を動機付け、励ます能力
- 分析の手腕(これからは、すぐに磨きがかかる)
- 研究対象への変わらない興味と好奇心
- 他者への誠実さと感性
- 優れたコミュニケーション能力(口頭・文書)
- 他者の酷評や屈辱に対して容易に傷つかない人
- 変えられないことを変える勇氣
- 専門家としての態度(物事を大局的にとらえる能力と専門家として自分の限界を認識する能力)

17

